

---

# 王子様は吸血鬼

風邪布名論

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

王子様は吸血鬼

### 【Nコード】

N7073M

### 【作者名】

風邪布名論

### 【あらすじ】

ある日の晩、妄想癖で苦しむ女子大生、石崎沙由美いしだきゆみのもとに一人の吸血鬼がやってきた。

彼の名は、キャロル・ヴァンドリー、由緒正しき吸血鬼家の正当後継者だった。だが、美味しい血を求めて、彼女の家忍び込んだことで

キャロルは沙由美と運命的な出会いをとげる。

これはそんな二人の愛（？）をつづつた感動の（????）物語である。

## 血の契約

7月3日（土曜日）午前2時。

すべての生物が活動を停止し、眠りについた頃。  
真つ暗なアパートの一室で、黒いマントを羽織った一人の男が、無邪気に眠る少女に馬乗りになり、その首筋に白い牙を突き立てていた

彼の名はキャロル・ヴァンドリー。  
いわずと知れた吸血鬼だ。

「フツ。可愛い寝顔だ。それでは、そろそろ  
ディナーといこうかな？」

ザクッ。

鋭い牙が柔らかい首筋に突き刺さる。

「ん……。」

痛さとそれに伴う快感で、悩ましげな声をあげる少女。キュートなピンクのつま先が、なにかをこらえるように白いシーツを掴む。

「ヘッヘッヘッ、どうだオレの牙は？」

だが、その直後、なぜか血を吸ったキャロルの

方が先に苦しみ始めた

「ん？ うっ……、おえっ、まずっ。」

キヤロルは両手で口を押さえて、ベッドから転がり落ちると、あわててゴミ箱に駆け寄り、吸った血を吐き始める。

「ゲホッ、ゲホッ、ゲホッ。」

すると、さっきまでスヤスヤと眠っていた少女が突然バサッと布団を蹴り上げ、飛び起きた。

「だ、だれっ？」

「ちっ、気づかれたか。」

キヤロルはあわてて窓を開けて、逃げようとするが、今度は血を吐きすぎて、へなへなとその場に倒れてしまった。

やがて、ゆっくりと部屋の明かりがつく。

「きゃっ、誰よっ？」

少女はキヤロルの姿を発見すると、青ざめた顔で慌てて壁際へと擦り寄った。

「あ、怪しい者じゃないんだ」

「……。」

「って言っても信じないよね？」

コクリと首を縦に振る少女。

「じゃあ、正直にいうよ。オレはドラキュラだ。」

「ドラキュラ？」

「ああ、オレは人の血を吸って生きてる吸血鬼だ。」

そういつて、元気な時ならガバツと少女に襲いかかるのだが、今のキャロルは空腹のあまり、極度の虚脱状態になっていた。

「吸血鬼ツ？ てことは私の血を吸いに来たの？」

「ああ、その予定だった。だが予定が狂った。君の血はあまりにマズ過ぎた。」

「どういう意味よ？」

ふくれっ面で、両手を腰に当てる少女。だがキャロルのただならぬ様子を見て、心配そうに声をかける。

「ていうかホントに大丈夫なの？」

「ああ、軽い貧血だ。心配はいらん。」

「ドラキュラが貧血って……。」

そういつて少女は大きくため息をつくとき、  
トタトタと台所にいつて、赤い水を注いだ  
コップを持って帰つてきた。

「飲んで。」

「なんだコレ？」

「いいからいいから。」

少女にそう言われて、仕方なくコップを口に運ぶキャロル。だがそれを口に含んだ瞬間、一気に  
中身を吐き出した。

ブーーーーッ。

「なんだコレ？」

「ケチャップ水よ。水にケチャップを溶かしたの。」

「なに飲ませてんだっ？ 殺す気かつ。つか  
こんなモン、人間でも飲めねーよ。」

「なによ血と同じ赤い液体じゃない？ なにが  
気に食わないの？」

「オレは赤い液体が飲みたいんじゃない、血が  
飲みたいんだ。うつ……。」

だがそこまで言ったところで、キャロルは再び貧血を悪化させて倒れてしまった。

少女はキャロルのそばに駆け寄ると、キャロルの上半身を抱き起す。

「そんなに血が吸いたいのか？」

うつろな目で少女を見つめるキャロル。

「……ああ。」

「じゃあ、私の血を吸う？」

しかし、今度はゆっくりと首を横に振る。

「それはイヤだ。」

「アンタねー、好き嫌いはつかし言っただめよ。」

「君の血は青汁の味がする。」

「ごちゃごちゃいってないで早く吸いなさい。」

死んだら元も子もないわよ。」

「チツ、わかったよ。」

そういつて、キャロルは少女の腕を強引に引っ張ると、背後から抱きつき、鋭い牙を首にあてて、優しくつぶやく。



「いただきます。」

ザクッ。

「待つて、私にも心の準備が。あ……。」

だが、キャロルの牙が深く首筋に食い込むと、少女の瞳は突然うつろになり、バタバタと抵抗を続けていた足もゆっくりと動きを止める。

そして、力強い腕の中で、少女の体はバターのようにドロドロと溶けていく。

かすかに漏れる吐息。

汗ばんだシャツ。

重なり合う二つの鼓動。

ちゅぱちゅぱ。

「ん……。」

やがて少女の血は、鋭い牙を通って、ゆっくりとキャロルの喉元へと到達した。

ひとしきり行為を終えた二人は、狭い部屋の中で、お互いのことを語り合っていた。

「私、石崎沙由美<sup>いしざきさゆみ</sup>20歳、

いま 大学に通ってるの。下宿だけどね。  
あなたは？」

「オレ？ オレはキャロル・ヴァンドリー。泣く 子も黙る吸血鬼族の跡取り息子さ。年齢はそう だなー、人間で言うところと20歳ぐらいか。」

そういつて赤茶色のウルフカットの髪をかきむしるキャロル。その色は蛍光灯に照らされると、一段と赤みを増して見えた。

「ところで、そんな吸血鬼さんが、なんでこんな 夜中に？」

「別に何の用ってこともない。オレたちはいつも 眠りについた下界の女性から血を頂いている。」

今日はたまたま見つかったただだ。」

「へーそうなんだ。私、てっきり下着泥棒かと思っちゃった。」

「下着ドロ？」

キャロルが思わず首をひねる。

「うん、このごろ私の下着がよく無くなるの。パンツとかブラジャーとか。」

「おいおい、よくそんな酷いことを言ってくれる な。オレはただ、君から血をもらいにきたただだぜ。」

「それ、もっと酷くない？」

そういつて呆れた表情を作る沙由美を無視して、  
キャロルは話を続ける。

「それよりもだ。君の血はいつたいどうなってるんだ？ めっちゃくちや変な味がしたぞ。今まで いろんな女性の血を吸ってきたが、こんな汚い 血は初めてだ。」

「あなたこそ、よくそんなことが言えるわね？ 命の恩人に向かつて。」

「誰が命の恩人だ？ そもそも最初に君の血を吸わなければ、あんなことにはならなかった。何か変なモノを食ってるんじゃないのか？」

そういつてキャロルは冷蔵庫の前に行くと、  
重い扉を開けた。  
ガチャ。

「ちょっとー勝手に開けないでよ。」

「別にいいだろ？」

「もう。」

だが、オレンジ色のランプが灯った冷蔵庫の中には、マヨネーズとケチャップが三本ずつ置いてあるだけだ。

それを見て呆然とするキャロル。

「なんじゃこりゃ？」

「マヨネーズとケチャップです。」

「それは見ればわかる。」

「じゃあ、何も問題ないじゃない。」

「大アリだ。つーかなんで冷蔵庫の中にマヨネーズとケチャップしか入ってないんだ？」

キャロルの執拗な問いかけに、沙由美はややキレ気味に応える。

「マヨラーだからよ。それにいざって時には、非常食にもなるし。」

「非常食？」

「そうよ、こうするの。」

すると沙由美は、冷蔵庫からマヨネーズを取り出して口にくわえろと、一気に中身を吸い始めた。  
ちゅーーーーー。

それを見て、慌ててマヨネーズを取り上げるキャロル。

「止めろっ、気持ち悪い。早死にするぞ。」

「うるさいわね。ドラキュラに言われたかないわ。」

「だからこそだ。オレの仲間が誤って君の血を吸って、オレと同じような目にあつたらどうするんだ？」

「何の心配してんのよ？ それに私、アンタたちのためにご飯食べてるんじゃないからね。」

「一体これのどこがメシなんだ？」

そういつて一定の距離を置いて、睨み合う二人。やがて、数秒後、キャロルが重い口を開く。

「こんなもんばかり食べてたら、太るぞ。」

「えっ？」

その言葉に、石像のように固まる沙由美。

「太るつたって……。」

「それだけじゃない。オレのいた村には、太り過ぎたせいで、死んでしまったヤツまでいる。」

「吸血鬼なのに？」

「ああ、そうだ。ハリソンという30過ぎの男だったんだが。そいつは昔からカロリーの高い人間の血が好きでね、毎日、何リットルもの血をガブガブと飲んでいた。」

だが、それでも周囲はそんな彼を止めなかった　オレ達は血さえ吸っていれば、死ぬことはない  
とタ力をくくっていたからだ。だが、そんな  
ある日。」

キヤロルの真剣な表情に、沙由美がゴクリと  
唾を飲み込む。

「ヤツはメタボになっていた。」  
「なにそれ？」

啞然とする沙由美。  
だがキヤロルは真面目な顔で話を続ける。

「メタボと聞いて、君は笑っただろう？　だが、侮ってはいけない。吸血鬼にとって、メタボになることは致命傷だったんだ。」

「どうしてよ？」

「棺桶のフタが閉まらないからだ。」

「……？」

「我々、吸血鬼は、日光を浴びたら死んでしま　う。だから、自分の棺桶のフタが閉まらないと　いうことは直接的な死を意味するんだ。」

「そんなオーバーな。」

「だが、被害はそれだけでは収まらなかった。」

ハリソンの恋人であるジェーンとマーガレットが、彼を助けようと、自ら棺桶のフタとなつ

て、直射日光に当たって死んだんだ。」

「ハリソン二股かけてたの？ ていうかフタになる以外に他に方法あるでしょっ？」

だが、沙由美の鋭い指摘にも臆することなく、話を続けるキャロル。

「しかし、依然としてハリソンの腹は引つ込まなかった。そのため、彼を守るうとした両親や兄弟・親戚たちは皆、次々に棺桶のフタとなつて死んでいった。そしてとうとう、すべての

身代わりを失った彼は直射日光に当たり、灰になった。」

「ふーん。」

「どうだ、メタボの怖さが分かっただろ。」

「メタボの怖さはよくわからないけど、吸血鬼がアホだっていうのはよくわかったわ。」

キャロルはコホンと大きな咳をすると話を続けた。

「とにかくだ。こんなものばかり食べていたら、体に悪い。オレが料理を作つてやる。」

「いいよ、もうこんな時間だし。」

「気にするな。血をもらったんだ。それぐらいは させてもらう。」

「ホントに？」

「ああ。遠慮はいらんど。なんでも言ってくれ」

沙由美はしばらく考え込んだあと、ゆっくりとした口調で、キャロルにオーダーを通した

「それじゃビーフストログノフと、フカヒレのスープで。」

「おい、ホントに遠慮ねーな、この女は。」

沙由美の住んでいるアパートの近くには、ダイエイという24時間営業のスーパーマーケットがある。キャロルは沙由美に描いてもらった地図を片手に無事そのスーパーまでやってきた。

ウーーン。

ゆっくりと開く自動ドア。

「いらっしゃいまへ。」



すると、どこからか眠たそうな店員の声が聞こえてくる。

「やっぱ人間は夜は寝なきゃダメだな。」

そういつてブツブツと独り言をいうと  
キャロルはつかつかと店内に入っていく。

店内は、BGMこそかかっているものの、夜間営業のためか、若干照明が薄暗く、客の入りもまばらだ。

だが、そんな状況でも、タキシードにマントを羽織ったキャロルの姿はひととき目を引いた。  
誰もがすれ違いざまに、驚きの表情で振り返る。

「なにあの人？」

「パーティーの帰りだろ？」

しかし、そんなことはお構いなしにマイペースで  
買い物続けるキャロル。

「あとは牛乳か。」

十分後、緑色のカゴには山盛りの食材がつまれていた。

「これでよしと。」

キャロルはそれを持ってレジの前に立つとカウンターからアナウン

スが流れた。

「少々お待ちください。」

すると十秒後、エプロン姿の男が駆け足でやってくる

「お待たせしました。」

男は深く頭を下げると、早速、片方のカゴに入った商品をレジに通して、もう片方のカゴに移動させていく。

そしてレジの電光掲示板には、緑色のキレイな文字で、買った商品の金額が順番に合計されていった。

1 9 8 0 円。

2 2 2 0 円。

2 5 5 4 円。

だが、それを眺めているうちに、キャロルはあることに気づいた。

「しまった、金がない。」

突然の告白に、レジを打つ男の手が止まる。

二人の間に流れる気まずい雰囲気。  
だが、満を持して店員が尋ねる。

「どうします?。」

「すまない。ちょっと家まで金をとってくる。」

「じゃあ、これは？」

「置いてくれ、すぐ戻るから。だが、もし勝手に商品を棚に戻してみろ、思いっきりお前の血を吸ってやるからな。」

そう言つて、もはや頼んでいるのか脅しているのかもわからないような言い方で店員に釘をさすとキャロルは駆け足で店を出た。

空は少しずつ明け始めている。

「まずいな。」

キャロルは背中のマントを広げると、ゆっくりと宙に浮かび上がった。

沙由美の家までは直線距離で百メートルほどだ。

「よし、いくぞ。」

ビューン。

風を切るマント。

周囲の景色が一齐に飛び込んでくる。

そしてその5秒後。

キャロルは一気に沙由美が住む二階のベランダにたどり着いた。スタツ。

「おいっ、沙由美、金をくれっ。」

ガラス越しにそう呼びかける。

だが、沙由美の部屋はなぜか大きな炎に包まれていた。  
メラメラと燃える室内。

「なんじゃこりゃ？」

キャロルは慌てて窓ガラスを開けて、部屋の中に入ると、沙由美を抱き起こして、頬をたたく。

「おい、しっかりしろ。どうしたんだ？」

だが、返事はない。

「チツ、くそっ。」

キャロルは沙由美の体を持ち上げて、ベランダの外まで連れて行くと、燃え上がる炎に自分のマントをかぶせた。

シューウウ。

数分後

「う……ん。」

ゆっくりとキャロルの腕の中で、目を覚ます沙由美。

だが、周囲の状況を確認すると、沙由美は慌ててキャロルを突き飛ばし、飛び起きた。

「いきなり何をするのっ？」

「それはこっちのセリフだ。それになんだこの状況は？」

「ただのボヤよ。」

「火事の種類の聞いてるんじゃない。なんで家が燃えているのかと聞いているんだ。」

「あー、なんだそういうことか。それなら話は簡単よ。犯人はアイツ。」

そついつて、沙由美は部屋の隅にある『さつまいも』と書かれたダンボールを指差した。

「犯人？」

「そうよ。実家から送られてきたサツマイモの箱をみているうちに、私は無性に焼き芋が食べたくなった。するとその時、突然、テーブルの上にサツマイモの精霊が舞い降りたの。」

「なんじゃそりゃ。」

「そして、彼女は初対面にも関わらず、空腹の私に優しく微笑むと、サツマイモに変身して、私の目の前に転

がったの。紫色の見事なボディに甘い香り。衝動に駆られた私は、思わず

よだれを垂らしながら、近くにあったライターで彼女に火をつけた。そういうわけ。」

「わかんねーよ。どんな幻覚っ！？　っーか  
やっぱ犯人はお前じゃねーか。」

キャロルはやれやれといった感じで、火消しに使ったマントを拾い上げると、ゆっくりと背中に羽織った。

「とにかく。無事でよかった。」

「なに？　心配してくれたの？」

「当たり前だろ。」

「どうして？」

「どうしてって、そりゃ誰だって心配するだろ　　う？。」

キャロルは顔を真っ赤にして、うつむき加減に応える。

「放っておけるわけないだろ。」

「他人なのにな？」

「ああ。他人でもだ。」

そういつて再び見つめあう二人。やがてキャラルが口を開く。

「っかどうしてくれんだよこのマント。コレがないと帰れないんだぞ。」

だが、穴の開いたマントをつけて、くるりと回るキャラルを見て、沙由美は大きな声を上げて笑い始めた。

「フフフ……。ごめん。」

「笑いごとじゃないぞ。」

「だって、フフフ。」

やがて、沙由美の笑い声はキャラルにも伝染した。

「こら笑うなって。」

「フフフ。」

「ハハハハハ。」

そして、沙由美がゆっくりとキャラルの耳元でささやいた。

「しばらくウチにいてもいいよ。」

「えっ？」

だが、すぐに頬を赤く染めて、首を横に振る  
キャロル。

「そ、そんなこと出来るわけないだろ。」

「でも、マントが破れてたら帰れないんでしょう?」

「そりゃそうだけど。」

「マントは私が直してあげるから。それに私と  
いれば、しばらくの間、血には困らない  
でしょ。」

「だけど、オレは沙由美に何をすればいいんだ?」

「かんたん。」

そういつて、沙由美は細い腕をキャロルの腰に  
回すと、たくましい胸に顔をうずめた。

「夜の闇が深い時、こうしていて欲しい、それ  
だけ。」

すると今度は、キャロルの腕が小さな沙由美の  
体をグツと抱きしめる。

「なるほど、それは簡単だな。でもそれだけで  
いいのか?」

そして、キャロルはそのまま沙由美をベッドに



押し倒した。

ドサッ。

「きゃっ。」

ベッドの上で絡み合う指と指。

沙由美の耳にキャロルの甘い吐息がかかる。

「それじゃ、早速、いただきます。」

「うそー、さっき血あげたばっかじゃない？」

「あれは挨拶がわりだろ。」

「なによ、さんざん不味いつていつたくせに。」

あ……。」

だが、キャロルが沙由美の首筋を刺激すると、急に優しい声に変わる。

「もう、うそつき。」

そして、沙由美の細い指がゆっくりとキャロルの髪をなでると、二つの影はやがて闇の中で激しく混ざり合った。

一方、そのころ、スーパーダイエイでは。

キャロルの再来店に備えて、商品を山積みにしたカゴが店内にむなしく置き去りにされていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7073m/>

---

王子様は吸血鬼

2010年10月10日01時40分発行